

修辭的の妙を極め、抑揚頓挫の法に合ふことを要するのではない。只だ其調子に感情を帯び、熱誠が籠らねばならぬのである。治療者の思想と希望とが自然に其言語を以て患者に傳へられ、患者は其言語の中に一種の振動を感じ、是に由て其精神を刺戟せられ、己れを忘れ、恍惚として治療者の言に魅せらるゝに至るを以て其理想とするのである。

是の如き能力を養成せんがために治療者は常に練習の功を積み重ねねばならぬ。夫れには左の如き方法を用ふるが宜ろしい。患者が自己の前に立ち、或は座し、或は其傍に横臥しつゝあり、是に對して暗示療法を施すと想像し、是に對して熱誠に満ちたる言語を以て、其病は必ず癒ゆべしとの暗示を與へ

るのである。而して患者の腦中に長く印象を留めしめんと欲する主要の言語に特に力を用ひて、幾度か是を繰り返へし、己れ自から其言語に含まるゝ意味に同化せらるゝを感ずる迄に至らねばならぬ。

例へば先づ「強壯」と云ふ語を擇び、強壯強壯強壯強壯と數多度此是を繰り返へし、一度は一度より力強く、且つ熱心に、遂に自から其全身は強壯の觀念を以て満たさるゝに至つて止め、次には更に健康なる語を取りて、前と同様に幾度か是を繰り返へして、自から其語の意味と同化さるゝを感ずるに至る様に勉むるのである。斯くなれば其言語は自然に患者の精神身體に感動を與へることが出来るのである。要するに其言語に熱誠と眞實とが籠らね

ばならぬのである。

暗示を與ふるものは又た其眼力をも養はねばならぬ。即ち熱心と誠意と力の籠れる眼光を有することを必要とするのである。此點に於ける各人の能力は天賦に依て相違すること勿論であるが、修養と實行とに由て何人も是を發達させることが出来るのである。是を練習する時の心得は思想を統一して常に事物の一點に注意を集中することを勉めるのである。治療者が斯の如き眼力を有する時は患者は是に魅せられて、全く其身心を治療者に一任するの心を生ずるに至るのである。患者の精神状態が此域に達する時には治療は殆んど意の如くなるのである。

次に治療者の精神的態度即ち其心の持方に就て云へば、常に熱誠に満ちて居なければならぬ。眞實心の底より患者に同情して、其至治せんことを祈る眞心がなくては叶はぬのである。又た其心を細事のために惑亂せらるゝことなく、常に一箇の主意若くは目的のために集中せらるゝやうに保たねばならぬのである。散漫なる心は何事をも爲すことが出来ぬのであるが、殊に暗示療法の場合に於て然りである。治療者の心が散漫なる時は、患者は何となく力なく、たよりないやうに感ずるのである。又た治療者たるものは自信がなくてはならぬ。若し自信力が不足なる場合には、意力と修養鍛錬の力とに由りて是を補はねばならぬのである。信任の力も他に感染するもので

あつて治療者が堅き自信力を有する時は患者も自然是に信任するのであるが治療者にして自信を缺く時は患者にも信頼の念が起らぬのである。信頼の念なき患者を癒やすことは全然不可能でないにしても甚だ困難であることを免かれぬのである。

三、患者の心得べきこと

次に患者の態度に就て云へば安樂椅子の如きものに凭り懸るも或は床上に横臥するも随意であるが凡ての緊張より脱して全身の筋肉をして出來得る限り寛舒ならしむることを要する。治療者は患者に對ひて出來得る限りくつろぎて身體をして自由安樂ならしめ其精神をも伸びくするや

うにせよと命ずるのである。治療者は患者の傍に席を占むるのであるが患者をして恐怖又は窮屈を感じしむることなきやうに注意せねばならぬのである。

暗示を度々反覆することは最も必要のことである。幾度か繰り返へさるることに由りて患者の精神は益是に吸收さるゝことになるのである。故に治療者は出來得る限り其主要の語をば幾度か繰り返へすことを要する。併し單調にして人をして倦厭を催はさしむるが如きことのないやうに注意せねばならぬ。夫れには音調を變へることも必要であるが其語句をも多少變化するを要する。暗示を患者の心に浸潤させることは是を砲臺の攻撃に

諭へることが出来る。種々の方面より手を代へ品を代へて、幾度か繰返へして倦むことを知らざれば遂には陥落するのである。暗示を繰り返へすに當りて其主要語に十分の力を籠め、是に振動あらしむることを忘れてはならぬ。

治療を施すに當りては、出來得る限り患者の心を散逸させぬやうにして専ら暗示の事項に集中させることに注意せねばならぬ。是がためには外界の物音の聞えぬやう、又た其兩眼が外界の事物に捕へられぬやうに其室を密閉するを要する。

暗示を與ふるに當りて、最も必要なることは患者をして其心中に希望の

光景即ち治療者が持來さんとする健康の状態病氣が徐々に驅逐せられて健康の回復せらるゝ状態をありくと描き出さしむることを勉むることである。思想は何時しか、行爲其他の形體に現はるゝものである。患者が其心中に描出する病氣全快の光景は幾度か是を反覆することに由りて、遂には實現せらるゝに至るのである。

單に言語を以て爾の病氣は癒やされたり若くば爾の身體は全く無病息災にして、何等の故障もあることなしと教ふることに由りて、疾病を治癒し得べしと云へば、是を一箇の奇蹟の如くに感ずるものもあるのであらうが、夫れは決して不思議なことではないのである。其言語と共に治療者の思想

と精力とは患者の心に傳はり、患者は虚心にして是を受領するが故に、其精神上に大なる力を受け、夫れが終に肉體の上に發現するのである。故に其成功の度は治療者の人格と技倆にもよるが、主として患者が信任の如何に依るのである。患者が確信を以て其心中に病氣全快し、無病健全の身となれりとの光景を描出する時に、必ず其病氣は全快するのである。

最後に臨みて注意すべきことは、暗示を與ふるに當りて、決して其病狀などを云うてはならぬ。只だ回復せる情態、即ち健全の情態のことに就て語るべきである。

又た消極的の暗示を與ふことは避けねばならぬ。常に積極的の暗示を

與ふるやうに勉めねばならぬ。例へば汝は最早病人にあらずと云ふことの代りに、汝は健全なり、強壯なりと云ふべきである。

第十四章 暗示の方法

前にも述べた如く、治療者も亦た患者と等しく暗示を與へんとするに當りて、先づ其心の中に回復せられんとする情態を描出せねばならぬ。是は治療者をして適當の暗示を與ふることを容易ならしめんがためにも、又た其思想を患者の精神に移さんがためにも甚だ必要なることである。

患者が暗示療法の如何なるものなるかを知らざる場合に於ては、治療に取懸るに當りて、先づ患者に對ひて、精神と肉體との關係、暗示が人の疾病を癒やし、是を健全ならしむる驚くべき力を有すること等に就て、簡單明瞭に

説明するを要する併しよく、注意せねばならぬことは、六箇敷理論や、細目に涉りて患者をして是を理解するに腦力を費やさしめ、或は倦怠の念を生ぜしむる等のことなきやうにすることである。精神が肉體を自由に左右し得ること、暗示療法に依て幾多の病人が全治して健全になれる驚くべき實例等を話すのが最も適當なのである。要は患者をして治療者の爲さんとする所を了解せしめ、治療者と共に心中に全快の光景を描き、心の戸を開きて治療者の精神的衝動を受領せしむるやうにすることである。

右の理由に依り、次に掲ぐる一般的暗示療法に於ては、常に患者をして精神の肉體に及ぼす影響の偉大なることを想起せしめんことに意を用ひた。

暗示を與ふるに當りて必ずしも以下に掲ぐると同一の言語を用ひなければならぬことはないのである。寧ろ自から欲する所に随つて自由に其言語を選んだ方が却つて有力なのである。

一、一般的暗示法

患者をして自由に安樂に且つくつろぎたる態度にて椅子に凭らしめ或は床上に横臥せしめて後治療者は是に對して親切と熱誠に満ち而かも威嚴ある態度と音調とを以て左の如く告ぐるのである。

『……さん、今貴君の身體は最も自然の態度に置かれてあります。身體全部の筋は伸びくとして弛く凡ての神経は休息して居ます。定めし貴

君は頭の先きから足の端迄氣樂に安穩に平和に靜謐に感ぜらるゝことであらましよう。尙ほ成るべく氣を樂にして休息なさい。而して私の暗示即ち私の貴君に語る事が深く、其心の奥底に沈み行くやうにお勉めなさい。其言葉は恰かも善き地に蒔かれたる種の如く、臈がて成長發達して貴君の體內より諸の疾病を取去り、貴君の身體をして健全無比のものとするのであります。』

『私は先づ貴君の胃の腑と其他の消化機を健全強壯にすることにいたします。是等の機關は食物を消化して、營養分を全身に補給することを司るのであつて、身體の健全を保つに最も必要なのであります。そこで私は先づ

貴君の胃が食物を十分に善く消化し、是を營養分となして、全身に配布し、身體の各部分をして強壯ならしめるやうに致します。」

「貴君の胃は健全無病であります、如何なる食物にても、貴君の身體を養ふに必要なものは、優に是を消化するの能力を有つて居ます。今日、只今より其能力は發揮されず、貴君が召上る食物は胃に由りて十分に消化され、悉く身體の營養になるのであります。貴君は強壯となる前に是非其胃袋を健全にせねばならぬのであるが、既に貴君の胃は強壯になりて、適當に其機能を發揮して居ます。貴君は自から既に是を感ずるでありました。而して今より後、貴君の胃は時々刻々に強壯になる計りであります。斯くて貴君

の身體は十分の營養分を給せらるゝに由りて、疾病は影を匿し、今日より以後日に益強健となる計りであります。」

「私が貴君を治療するに當りて、貴君も私と共に働く積りでなくては、いけません。働くこと云ふことは、固より精神上の意味で申すので、斷えず其心を平和に、安穩に、且つ快活に保つやうに勉めることであります。心が喜悅と快活に満てる時は、病氣は自然に身體より去りて、忽ち壯健に復することが出来るのであります。快活、平和、喜樂等の語を斷えず其心中に繰り返へして、是を實現することを心懸けることが必要であります。」

「是より私は貴君の血液の循環をして平均せしむるやうにするのであ

ります。身體の營養に次いで、血液の循環を正しく平均せしむることは、身體の健康を保つに最も必要のことです。貴君は今直ちに全身の血液を、して正當に滯りなく循環せしむることが出来るのである。即ち、今現に貴君の血液は頭より足の端に至る迄自由に、穩かに滯りなく流通循環しつゝあるのである。即ち其血液は營養分を運んで身體の凡ての部分に至り、又た身體の各部から汚廢物を運び來りて、肺中に於て是を燃焼し、最後に是を體外に排出し去りて、更に新鮮の營養分を以て是に代へて居るのであります。殊に貴君が完全なる深呼吸を試むる時は、肺中に多量の酸素を吸収することを得るが故に、一層良く血液中の汚物を燃焼することが出来るのであります。

す。而して貴君は既に其完全呼吸法を實行しつゝあるが故に、血液中の汚物は断えず體外に排出せられ、體内の血液は常に新鮮純潔にして、間断なく流動循環しつゝあるのであります。

「貴君は又た體内の汚廢物を適當に排泄することに注意を怠つてはいけません。適當に通じを得させるには、適度に液體を體内に供給せねばならぬ。毎朝コップに一杯宛清水を飲み、其間にも時々是を飲むがよるしい。而して是を飲む時には、是に由て我が體内を清め、其汚廢物を體外に排泄するのであると云ふことを、思考せねばなりません。斯くて貴君の體内に於ては、既に淘汰作用が盛に行はれて、今晚若くば明朝より滯りなく排泄作用が行は

れ身體の故障は取除かれて、壯健の身となることが出來るのであります。』

『斯く貴君の身體の各機關は今や悉く健全になりて、夫々適當の活動を始めて居ます。貴君の胃は既に丈夫になつて居ますから、如何なる食物でも、自由に是を消化して全身に營養を供給することが出來ます。随つて貴君の身體は日々健全強壯になる計りであります。貴君の血液の循環も今や正常に復して、些しの滯りもなく、自由自在に全身を流通して居ます。殊に深呼吸の力に依りて、肺中に戻り來る血液は十分に清新せられて、朽廢物は悉く體外に排出せられて居ます。又た排泄機關の整調と清水の飲用とに由りて、排泄作用は規則的に快く行はれ、汚廢物は些しも體内に凝滯することはあり

ません。貴君の身體の最も重要な機關は悉く健全にして、十分に其機能を發揮して居るのであります。是より貴君は氣分を快活にして愉快に幸福に日を送ればよいのであります。』

以上は一般的暗示法の型を示したに過ぎないのである。治療者は患者の境遇病狀教育の程度等に照らして、自から最も適當と信ずる言語方法を選択すべきこと勿論である。一般的暗示が終つたならば、次には疾病の局部に對する特殊の暗示を行ふのであるが、其方法は單に病の存在する部分に就て暗示を與ふるのであつて、一般的暗示の方法と異なる所はないのである。

其病氣の如何に關らず、一般的暗示に由て利益を得ること甚だ多いのである。暗示の例に由て明かなる如く、一般的暗示の主意は消化機作用と、血液の循環と排泄作用とを完全ならしむるにあり、此三つの働きは、圓滑に行はるれば、殆んど凡ての病氣は自然に全癒して、身體は必ず健全強壯になるのである。

月經不順の如き婦人病に對しても、此方法は驚くべき効果を奏するのである。血液の循環をして凝滯なく行はれしめ、或は排泄作用をして規則的ならしむると、其原理に於て些しも異なる所はない。治療者は患者に對して、其機能は何等の故障なく、完全に活動しつゝあることを告げ、次の時期には必

ず効果あることを信じて期待せしむるのである。其心中に効果の現はれたる情況を描出するの必要なること、固より論を俟たざる所である。各種の病氣に就いて一々其方法を記載せずとも、讀者は前記の例に由て類推するところが出来るであらう。如何なる病氣にても患者の側に於て共働の心懸さへあれば、暗示に由て治癒し得られざるものはないのである。

第十五章 自己暗示

人が其心中に考ふる所は即ち其人自身なりと云ふ諺があるが、夫は慥かに事實である。吾人は響きに心身の關係を論ずるに當りて、肉體上の病氣の大多數は其人自身の心から生ずるものであつて、健全強壯と云ふことも、全く心の持ち様に依て來るものであることを明かにした。要するに、鬼も佛も我が心の作出する所たるに外ならぬのである。

一、邪念と恐怖心を取除くこと

殊に恐怖と云ふことは精神上の害毒であつて、多くの病氣は是から生ず

るのである。故に是を除けば立るに治癒するのである。されば己れ自から己が病氣を癒やさんとするには前章に示した方法に随つて、患者に與ふると等しく、己れに向つて暗示を與へねばならぬ。即ち「我れ」と稱する主人より身體の各部、各機關、各細胞の心意に對て暗示を與へるのである。是等の暗示が熱心と眞面目とを以て與へらるゝ時は、必ず其効果を見ることが出来る。元來病氣は誤れる暗示即ち誤れる精神に基きて起るものなるが故に、是に正當の暗示を與へて、其精神をして誤解を悟らしむれば、病氣は全快するのである。是は心理學的の法則の然らしむる所であつて、決して不思議なことはないのである。

尤も自己暗示を行ふ前に、其肉體と精神とをして健全の原理に随はしむるやうに勉めねばならぬ。即ち其精神に於ては、猜疑、嫉妬、憎悪、煩悶、恐怖等の情を去りて常に平和安心にして、光風霽月の感を持つることである。身體上に於ては、本書の第二章に述べたる健全の天則を遵奉するやうに注意せねばならぬ。身體上に於ける病氣の原因なるものは、十中の七八迄、營養の不分なると、排泄作用の不完全なるより來るのである。若し是を疑ふものあらば、多くの病氣が如何にして起るか考へて見るが宜しい。

二、營養と排泄作用を十分に良くすること

例へば食欲が十分でなく、其消化作用も不完全にして、胃病又は消化不良

に陥り、次に便秘を患ふるか、或は婦人ならば月經不順を感ずるとせよ。夫よりあらゆる病氣の兆候が現れ來るのである。其結果として現はれ來る兆候は左の數者又は其一であることは疑を容れざる所である。先づ第一に手足が冷える。是は血液の循環の不足なるを證するのである。夫れから聽覺と視覺とに影響を受けることがある。即ち耳が鳴つたり、眼がかすんだりする。ことがある。又た神經が不自然に過敏になることがある。其皮膚の色は、碌々眠られず、天下のあらゆる事物が氣に懸つてたまらない。其皮膚の色は土色を帯びて、面色は蒼白になり、唇や爪の色迄も變るやうなことがある。其外營養不良と排泄作用の不完全なるより起る疾患は、擧げて數ふることが出來ないの

である。故に先づ病を癒やすには、是等の二作用が十分完全に行はれるやうに手當てをすることを忘れてはならぬ。

偕自己暗示の方法は畢竟するに、他人に施す所を己れに施すに外ならぬのである。先づ其心眼に自分が斯の如くならんと欲する光景を映出し、次に自分は即ち夫れであると断定し、健全無病の人間として座作行動するのである。斯く先づ大體に於て、自から健全なるものなりとの確信を樹立し、然る後其本能的の心意に向つて、其欲する所を自由に命令するのである。即ち其體内の各部分各機關の細胞の新たに構成せられ、病的の舊分子が旭日の前に雲霧の消散する如く、亡び失せんことを命ずるのである。己れに確信あれば、

其命ずる所は悉く随はれ、病的元素は忽ち體内より逃げ去り、身體の全部悉く新細胞を以て作られ、其精神も身體も活氣と生命とを以て満たさるゝに至り、己が身に疾患あることを忘るゝに至るのである。

其所作の餘りに單純に過ぐるの故を以て、讀者諸君中或は疑惑を懐くものあらんも、そは大なる誤りである。複雑にして、手数の面倒なることが、必ずしも良効果を現はすものではない。正當の理法に隨へば、反て簡單の方法が有力なのである。前にも申す如く、病氣は主もに心の迷ひ、又は心の空虚なるより生ずるものなるを以て、自から堅く健全の理法に隨ひ、而して己れには病氣なしと確信すれば、其處で既に病源は斷たれたのである。夫より後は漸

次健康の度を増し、残れる病魔を全く驅逐し了れば良いのである。夢疑ふことなく、読者が確信を以て、是を實行せんことを希望するのである。

第十六章 精神治療

一、暗示療法と精神療法

思想が肉體の上に大なる影響を與ふること、殊に誤れる思想のために、種種の疾病の醸成せらるゝことに就ては、暗示療法の下に於て、是を詳述したれば、讀者は既に此點に關して、精確の知識を有するものと見做し、茲に是を反覆することを避くることとするが、精神療法も暗示療法と同じく、人の精神状態が其身體の上に種々の變化を與ふると云ふ事實の上に、其基礎を置くのである。換言すれば、疾病の多くは精神上より起るものであるれば、其精

神状態に變化を與ふれば乃ち其病氣は去るべきものであると云ふ原則に基くのである。

斯く暗示療法と精神療法とは同一の原理原則に基くものであつて、つまり同一のものを異なる方面より觀察したるに過ぎないのである。然らば其相違の點は何處にあるかと云へば、勢力を應用する方法即ち治療の方法に在る。暗示療法に於ては主として言語を以て思想を傳達せんことを勉むるのであるが、精神療法に於ては直接に心より心に勢力を傳へる即ち以心傳心の方法を探るのである。併し實際人を治療するに臨んでは暗示療法に由るとか或は精神療法に由ると云ふ如く、此二箇の方法を別々に用ゐること

は少ない。多くの場合に於ては、此二箇の方法を併せ用ゐるのである。但し夫れは患者が治療者の目前に在る場合のことで、精神療法に於ては必ずしも患者は治療者の前に出なければならぬと云ふ必要はないのである。遠距離治療法と稱して、患者と治療者とは互に遠く離れて居ながら治療の效を遂ぐる事が出来るのである。

三、遠距離療法

一時は斯の如きことがあり得べき理由がないとして、一笑に附せられたものであるが、近來に至つて漸く世の科學社界に於て、其可能を認めらるゝに至つたのである。併し此事は頗る古くより人類社界に信せられ、且つ實行せら

れ來つた事であつて世の心理學者は今更の如く是を發見したるものゝ如くに言ひ做すが決して新奇なることではないのである。兎にも角にも世間第一流の學者が此事實を認むるに至たことは疑ふべからざることである。左に是が二三の例證を舉示することとする。

三、泰西學者の證言

心理研究會の書記たりし故エドウィン・ネット氏曰く「智識が精神に入るの途は五感に限られざること、今や否むべからざる事實の如くに見える。換言すれば心理學の研究は精神と精神との直接交感を以て、科學的に證明し得べき事實として認むるに至つたのである」と。

紐育の有名な科学者ジョン・クワッケンボス教授は曰く「メテルリンクが曾て豫言したる如く、今や學術は精神が五感の媒介なしに直接に相接觸し得ることを認むるに至つた」と。

クラーク・ベル氏曰く「精神交感と云ふことは、今や學術界に於ける公認の事實であるが、只だ電流又は引力の作用の如き一種の作用が精神と精神との間に行はると云ふことを假定するのみにて、未だ夫れが如何なる力であつて、如何にして働くものであるかと云ふことに關しては、十分に研究が遂げられて居ない。此點に關しては、尙ほ大に後世の研究に俟たねばならぬのである」と。

英國有名の科學者ウヰリヤム・クルツクス教授曰く「吾人若し腦髓なるものが神經細胞なる分離し得べき分子より成立すると云ふ學說を承認するならば、是等の分子は他の物質に於けると等しく、振動作用を有するものと思はねばならぬ。而して適當の事情の下に於ては、イーサーの振動に由て影響を受くることも亦たあるべきことである。果して然らば、他は是と相等しき性質のものありて、餘り遠からざる所に存在するとせば、イーサーの波動に由りて、兩者の間に交感の起ることなしとは固より斷言し得べからざる事である」と。

博士シエルドン・レヴァイツト曰く「精神交感の可能なることに就ては學理

上疑を介むべき餘地がないのであるが、余は余自身の經驗に依て其確かにあり得べきことを信するのである。余は自覺せる精神より他の自覺せる精神に影響を與へ得ることは勿論、自覺せる精神より他の不自覺的精神に感動を與へ得ることも、出來ることを確信して疑はぬのである」と。

佛蘭西の天文學者カシーイ・フアマリオン曰く「互に相隔たれる一の精神より他の精神に、言語其他五感の媒介なしに影響を與へ得ることに就ては、科學上に於て、決して是を否定すべき理由がないのである。遠距離に於て、一箇の腦髓より他の腦髓に感動を與へ得ることは、理論上あり得べきことにして、是を一箇の不思議の如くに思ふは、畢竟するに其人の智識の淺薄なる

ことを證するものである」と又曰く「吾人の精神的な作用がイイサーに波動を
 與へ、是に由りて他の精神に交感し得ることは電話の作用に於けると其理
 を同うするものであつて、或人の想像する如く決して不思議のことでない、
 確たる學理上の基礎を有するのである」と。
 精神交感のあり得べき事に就ての學者の意見を記せば數限りなきこと
 故、茲には一例を示す丈けにして置くが、此點に關して、世界の學者が如何な
 る意見を懐くか、其詳細を知らんと欲する人は英國心理學會の報告書を閱
 讀せられんことを希望する。該報告書は大抵の圖書館には寄贈せられてあ
 る筈である。

遠距離治療法即ち患者と治療者と相見することなく、言語を以て暗示を與ふることなしに、人の疾病を治療する法は此精神交感の原理に基くのである。精神交感と云ふが如きことがあり得べからざることゝすれば、遠距離治療と云ふが如きことも亦た出來得べからざることであるが、若し精神交感が可能であるとすれば、遠距離治療も爲し得べきことなのである。前にも述べた如く、精神治療と云ふことは、各人の中央心意が身體の各機能、即ち各機關細胞及び身體の各部を通じて現はるゝ心意を支配し得るに依りて成し遂げ得らるゝのである。後者は前者の情態に依て左右せらるゝのであつて、前者に何等かの變化が起れば、必ず其影響は後者の上に及ぶの

である。是に於てか、治療者の勉むる所は患者の精神状態（即ち中央心意の）をして健全正常ならしめんとすることである。中央心意の健全正常なることは、精神自身の自信力とも稱すべきもので、精神が身體を支配すること、身體の各部各機關は自己の命の儘に働くものであると云ふことを確認することである。一度び其心意に此確信が出来れば、人は決して病氣に犯さるゝことなく、縦令病氣に罹つても、自からは是を治療することが出来るのである。而して其治療の力は心意が肉體を支配する力換言すれば心意の自信力に比例するのである。

併し多くの場合に於て、病人の心意状態なるものは種々の原因事情のた

めに甚だ脆弱不適當のものとなつて居るのである。是に於て治療者の必要が起るのである。精神治療に従事するものは自然に其精神が健全であつて、且つ精神交感の術に達して居る故に、患者を治療せんことを請はるゝに當りては、特に其精神の震動を高めて、是を患者の精神に移すのである。其結果患者の精神にも震動を起し、大に健全正常の情態となりて、身體の各部各機關各細胞の上に反動を及ぼすのである。換言すれば、本能的精神が徐々に正常的情態に復するのである。

精神治療にも種々の流派があつて、多少其方法を異にして居るが、其原理原則に至ては、畢竟如上の理論に外ならぬのである。随つて其方法は異なれ

最新精神療法

ども同一の勢力を用ひて病を癒やして居るのである。流派に由て其所説と、方法を異にするに關らず、何れも實際に於て治療の效を奏するは是がためである。次の章に於て吾人は吾人が見て最上の方法と信ずる治療法を示すこととする。

第十七章 精神療法の實際

精神療法の實際を述べらるに先だちて讀者に一言したきことは、思想力療法、暗示療法等に就て述べたる治療者の心の持方、並に治療法等に關する部分、分を熟讀して、是を心に銘記せんことである。是等の方法は凡て廣き意味に於て云ふ所の精神療法の一部なのであつて、互に關係聯絡を有つて居るのであるが故に、其凡ての方法と原理に精通せんことは、何れの方法を行ふにも、大なる助けとなるのである。

一、患者の状態を心眼に描出すること

第十七章 精神療法の實際

倍精神療法を行ふに當りて、治療者の先づ第一に爲すべきことは、患者に對して自から成し遂げんと欲する所を有々と心眼に浮べることである。換言すれば、其腦裏に患者の身體——其各部分各機關各細胞の機能別——が健全に復し、平常と異なることなく活動しつゝある情態を最も明白に畫き出すのである。治療の効果の有無は此心眼に現はるゝ映寫の強弱に比例するのである。故に治療者たるものは、常に其想像力を修養して、自由自在に其心眼に希望の光景を畫き得るやうに勉めねばならぬ。此力は固より修養に依り得らるゝのであつて、日々是を練習する時は、一二箇月にして驚くべき程度に其能力は發達するのである。随つて治療の力も非常に發達するのである。

二、其映像を患者に傳達すること

其映像を他に傳達するに就ては、必ずしも努力を要せぬのである。最も必要のことは、前に述ぶる如く、其映畫を現在肉眼に於て目撃する如くに明瞭に、確實に心眼に現出せしむることであつて、是さへ出來れば、只だ夫れが患者の許に傳達せられて、患者が斯の如く強壯になると云ふことを想像するだけで十分なのである。其映出せられたる心眼の現象は、患者の精神に反響を與へて、驚くべき効果を奏するのである。

或種の心理學者又は精神治療者は、思想を他に傳送せんがためには、大なる努力を以て精神の統一集中を勉め、是を發送するに當りても、少からざる

苦心を要するが如くに説くのであるが、是は大なる誤謬である。精神の統一集中は單に心眼に現はるゝ映寫を明白ならしめんがために必要なので、夫れが出来れば是を傳送するに就ては別に苦心や努力を要せぬのである。却て斯の如きことに努力を費やす時は、折角現出せしめたる映寫を朦朧ならしめて、其効果を減ずることになるのである。只だ其現象が先方に傳達せられて、先方の精神上に影響を與へると云ふことを考へれば、夫れで十分なのである。尤も其上に其映畫が自己の腦中を離れて、空間を横ぎり、先方の腦中に入ることを想像すれば、其効果をして一層確實ならしむることが出来るであらうと思はれる。

三、患者が目前に在る場合

患者が己が目前に在る場合には、出来得る限り彼をして心を静かにして、氣を落著かしむることを勉めねばならぬ。名利の念や、生活上のことや、家事の係累より暫し其心を脱せしむることが必要なのである。是がためには、其室内を静寂に且つ薄暗くして、外界の喧騒や、げばくしき光線などの入來らぬやうにするがよいのである。

斯くて患者の方に準備が出来たならば、治療者は静かに其前に座を占め、其腦中に患者が回復して健全の身となりたる光景をありくと畫き出し、是を患者の精神に移植せんことを勉むるのである。前にも述べた通り、主要

の點は心眼に患者の回復せる状態を畫き出すに在りて、其後に只だ是が腦髓の震動に由りて、患者の腦髓に交感することを想像すればよいのである。尤も此映畫を形造るために便利なりと思はるゝ場合には口中に於て私かに言語を用ひてもよいが、固より必要のことではない。要は只だ心裏の映畫を出來得る限り明瞭にして、手術中是を持續せしむるにあるのだ。

患者の信任の念を増さしむるために、精神の力の偉大なること、精神と肉體との關係、精神交感の理等を説き聞かせ、且つ患者に對して慰藉獎勵の言を與へることの有益なることは勿論である。併し是も必要條件ではない。精神療法は是等の理由を了解し得ざる小兒に對しても、聾啞者に對しても有

効なのである。

四 患者が遠距離にある場合

遠距離治療法は遠方に在る患者を治療するのであるが、其方法は別に異なる所がないのである。治療者は其眼前に患者が居るものと假定して治療に取懸るのである。即ち其腦中に患者の健全になれる状態を描出し、是が腦髓の震動に由りて、患者の精神に傳へられて、其精神状態を改善し、是に由りて其全身全體を治癒することを想像するのである。豫め患者と打合せて置いて、治療の時間を定め、患者をして閑靜なる室内に於て治療を受くる準備を整へしめることが出來れば、固より甚だ結構であるが、是れ必ずしも必要條

件ではない。患者は知らずに居ても、尙是を治療することが出来るのである。前にも述べ通り、本書に記せる諸種の治療法は皆な其原理を同くして、只だ其方法を異にするものである。故に實際に於ては諸種の方法を併せ用ふる方が宜しいのである。治療に従事せんとするものは、宜しく諸種の方法を比較研究して其長を探り、以て自から最も己れに適すべき一新機軸を發明して、差支へ無いのである。否、然らんことを著者は讀者に向つて切望するのである。

最新精神療法 終

(不許再製)
 大正五年十二月四日印刷
 大正五年十二月十日發行
 定價金七拾五錢
 著作 松田 靈洋
 東京市麻布區本村附三十二番地
 發行 矢野信三 郎
 東京市京橋區第十部附十五番地
 印刷 阿部節治 社
 東京市京橋區第十部附十五番地
 發行所 東京市銀座區一丁目一號
 公報社
 東京市銀座區一丁目一號
 電話 五〇〇六
 電報 一〇五

IT 8N25

終

